『なぞなぞ』

作者　淺羽　一

さて、僕は誰でしょう。

僕の名前は人によって、違う呼び方をされる事があります。

さらに時と場合によって、価値や意義が逆転してしまう事だってあります。

ただ、それがどんな呼び方で、どんな在り方であれ、多くの人は僕を見ると妙にすんなりと受け入れてくれます。納得顔や、あきらめ顔、泣き顔や、笑顔、彼らが浮かべている表情が同じとは限りませんけれど。ちなみに、これは大きなヒントです。

僕はしばしば知ったかぶりをしています。でも、ほとんどの人はその事に気付いていません。僕に出来ることは、ただただ全てが終わった後で、最初から何もかもを知っていたかのごとく振る舞って、それを勝手気ままに脚色したり削ったりしながら語ることだけです。僕には、最初から自分の手で何かを成すということなど出来はしないのです。

僕は都合良く人に使われることが多いです。無理矢理に引っ張り出される事も多いです。それでいて実際に役立っているのかどうか、正直、疑問なのですが、そのくせ特に必要を感じられないような時ほど喜ばれる事が多い気がするのも事実です。需要は多いみたいです。ケーキの上に立っている蝋燭だとでも喩えられるのかも知れません。詰まる所、単なる飾りです。味には、少なくとも良い影響を与えることはありません。だけど、その飾りがなければ美味しいケーキですら、歳の数の蝋燭を挿された「ただのケーキ」に負ける事さえあるのです。思い込みや錯覚は、人生を飾る便利な代物です。…少し、饒舌になりすぎたでしょうか。

僕は「まるで融通の利かない偏屈者」という風な印象を持たれている事が多いそうです。一度決めたことは頑として譲らないタイプと言う事らしいです。しかしながら、人によっては「笑わそうと励めば微笑んでくれる相手」と言った、何やら温かい感じのする印象を抱いてくれてもいるそうです。それに関しては喜ばしいです。ただし、それでも「励まなければ微笑まない」と思われていることは、少なからず寂しくもありますが。

自分で言うのも何ですが、僕はわりと人から信じてもらえる事が多いです。勿論、中には絶対に僕の言うことなど信じないと顔を背けられることや、いえ、それどころか完全に無視されることもありますが、それはそれで皆さんの自由なので気にしていません。と言うよりも、先ほどから僕自身が言っている通り、至って冷静に観察してみれば、そもそも本当に信じられる要素があるのだろうかという疑問も湧いてきます。穿った見方かも知れませんが、僕を信じてくれる人の多くは、「自分が僕を信じている」と言う事そのものを「信じたい」と思っているのかも知れません。

長くなってきましたので、そろそろ終わらせたいと思います。だからここで、最後に幾つかヒントを記し、終わりにしたいと思います。

僕は遥か遠い昔から存在しています。そして、世界中の至る所に姿を現せます。いっそ虚構の世界の中にさえ登場します。呼ばれれば何処にでも参上するからです。逆に言えば、呼ばれない限り自分から出しゃばることはありません。それでも僕はきっと、この世界のどんな王様や大統領よりも有名で、人を動かせる象徴なのです。

…さて、僕は一体、誰なのでしょう。

〈了〉